生野センター機関誌

# 울림（ウルリム）（響）

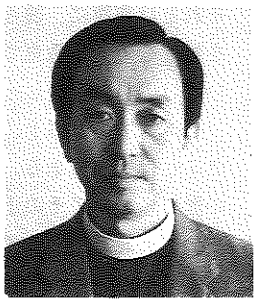
1997年4月20日発行

第3号

題字：康秀峰

# “ひとつの痛み”を通して

齊藤　壹



1980年前後、私の関わっていた子どもの施設で、一部指導員による“体罰”が日常化していたことがありました。それは密室で行われ、子どもが保母さんに訴えても、職員間の力関係があり、子どもの言い分が無視される結果になることが多く、後の仕打ちを恐れ、信頼する職員にさえ秘密にしておいてくれるよう頼むほどの有り様でした。そうした中、小学5年の少年Yが、施設内で盗みの疑いをかけられ、自白を強要され、堪りかねて脱走し、連れ戻された後、“少年に問題あり”として措置変更されるという出来事がありました。

いわば子どもの冤罪事件です。彼は天涯孤独の少年でした。措置変更先の施設へ彼を訪ね、事の次第を知った私は、このことをきっかけに、まず内部での善処を訴えました。解決の方法は簡単なことです。当の指導員と施設側がその少年に「悪かった」と謝罪し、本人が望むなら元の施設に戻せば良いことなのです。ところが、これが出来ず、指導員が反省しているのだから赦すよう理事者側は私に促したのでした。おかしな話で、当の少年のことは抜きになっているのでした。そうした経緯の中で、私は理事者と対立し、事態は膠着状態となり、私は「人権侵害救済申立」を大阪弁護士会に提出したのでした。

以来5年、「少女リンチ死」という痛ましい事件を契機に体制が変えられるまで、私は施設の中に住みながら没交渉とされ、つまり“干され”、教会の礼拝出席者も年々減少していきました。

さて、私の中に起こった義憤は、私が父親のいない家庭で育ったことに起因したと言えます。母や祖父母の愛情に包まれて育っていた私でしたが、それでも何かの折に寂寞とした不安を感じることがありました。まして天涯孤独の少年の屈辱・怒り・不安はいかばかりであろうかと推察したことが出発点です。この時、私を行動へと促した決断は、この一人の少年の尊厳が回復されるのでなければ、いかに教会員が増え、施設と良い関係を保ち、牧師として評価されても、私の信仰や宣教はイエス様の前には無に等しいということでした。

今、私はY君という一人の少年に出会えたことを幸いなことだったと思っています。彼の存在が私の信仰の良心を呼び覚ましてくれたのです。

指紋押捺拒否、外登証常時携帯義務制度撤廃の運動が盛んにおこなわれだしたのが、丁度その頃でした。ひとつの痛みが自覚されると他の痛みも共感できるようになるということでしょう、私も集会やデモに加わりました。そして改めて足元を見れば、施設にはかなりの在日韓国朝鮮人の子どもがいたのです。卒業生たちが人知れず味わっていたであろうこと、またそれ以後に巣立つ者もやがて味わうであろう屈辱感に思いを馳せることができるようになったのはこの頃からでした。

思えば、ルカ福音書にある「金持ちとラザロ」のたとえ話は、実は私たちのすぐそばにある物語なのだということでもあるように思うのです。

（さいとう・はじめ　司祭　桃山学院大学チャプレン、大阪教区常置委員）

## 時のしるし

# 歴史認識　日本人としての誇りとは？

松山　献

「自由主義史観研究会」という名称の会が世間を賑わせている。彼らは、ものごとのある部分だけを語って、ある部分はまったく語らないという手法をとり、教科書にもそれを要求する。科学や学問とは程遠い幼稚な手法を用いて、結論の決まった主張を繰り返す。「自由主義」という心地よい言葉で人々をごまかし、人々の「情」の部分に訴えかけ、情報操作を試みている。情に弱い日本人は、彼らの話を聞いてすぐにだまされてしまう。彼らは「日本人としての誇りをもてる教育」を主張するが、それとは裏腹に、彼らが主張するのは、むしろ誇りを持てなくする教育である。私たちは、だまされないだけの見識眼をしっかりと養いたい。

日本人である以上、日本人としての誇りを持つべきことは当然である。そのゆえに、私たちは、日本の歴史についてその正負ともにしっかりと学び、正しい歴史認識をもって、日本の現在と将来を考え、日本人としてなすべきことを行わなければならない。日本人としての誇りとは、事実を事実として直視した上で、これからの自分たちの在るべき姿を求めるときにはじめて培われるものである。事実を覆い隠したような誤った歴史認識、誤った観念の上に培われるものは、誇りではなく、ただの傲慢でしかない。

キリスト教関係の会合で、よく耳にするのは「過去にこだわるのではなく、未来に向けて前向きに考えるべきだ」とか「それも大事だが、環境問題などもっと差し迫った大きな問題を考えることの方が重要だ」というセリフである。過去の戦争責任を問うのは、過去にこだわるためではない。私たちが未来に向けて先へ進むためである。シーサーは、ルビコン川を渡った。それは、ルビコン川を越えないことには、その先に進めなかったからだ。ルビコン川を渡ることがどんなに困難であろうとも、その困難を越えないことには先へ隊列を進めることができなかったからだ。戦争責任問題は、日本人にとってのルビコン川だ。戦争責任の問題を解決しないからには、先へ進めないのである。ルビコン川を前にして、それを渡る勇気を持たずにうろたえてしまっているのが今の日本人の姿なのだ。

そして、そこに全く欠けているのが、犠牲者たちへの視点である。歴史に翻弄された犠牲者たちのうち、今も生き残っている人たちに対しては、少しでも残る人生をより良く送れるために力を尽くすことが、無意味というのだろうか。ますます彼ら彼女らの余命が少なくなっていく今、このことほど差し迫った問題はないのではないか。大きい石のために小石は捨てるという発想でいいのか。まして、キリスト者ならば、九十九匹の羊を置いて一匹の迷える羊を探しまわるべきではないのか。多くのキリスト者に問いたいと思う。

そして、亡くなった犠牲者たちについては、「あの戦争が誤りだったとすれば、彼ら彼女らの死は犬死にだったのか」とよく言われる。あの戦争を肯定することが彼ら彼女らの死を犬死にとしないのではない。あの戦争という史実を過ちとして認識した上で、私たちや私たちの子孫が、これから彼ら彼女らのような死に方をしないような世界を作り上げることが、彼ら彼女らの死を犬死にとしないのである。このことによってしか、彼ら彼女らの死を無駄にしない方法はない。つまり、戦争犠牲者の死を生かすには、私たちが二度と同じ悲劇を繰り返さず平和を保つということによってしかないということだ。あの戦争を肯定することは、かえって犠牲者たちの死を犬死にとしてしまうのである。

「日本だけが悪いことをしたわけではない」ともよく聞くセリフである。しかし、これは大の大人の言うセリフではなかろう。「〇〇君も同じことをしてたのに、どうして僕だけあやまらなければいけないの？そんなの不公平だよ」と泣きわめく子どものようだ。他がどうあれ、正しい在るべき形を追求するのが、人間として当然の姿であろう。そうした生き様を貫けるとき、はじめて日本人としての誇りをもてるのではないか。

すでに科学的に実証されている事実を否定して、次代を担う子どもたちにそれらを覆い隠すことは、子どもたちに永久に日本人としての誇りを持てなくしてしまう。私たちは、かつて日本人が犯した過ちも、そして功績も、共に語り継いで、正しい歴史認識に基づいた誇りを持ちたい。それが真の誇りであり、そのような誇りだけが、日本という国の在るべき未来を築くことができるのだ。

（まつやま・けん　京都聖ステパノ教会信徒　大阪教区在日韓国・朝鮮人宣教協働委員会協力委員）





# 私的だけれど、わくわくする催し
# でも、きっと誰もが満足すると思う。

牧口　一二

今年４月で聖公会生野センターは５周年。思えば私はグラフィックデザイナーであり、大阪聖ヨハネ教会信徒ということもあって、当センター建設計画が持ち上がった時、その意義と建設資金カンパを募るポスターを制作させてもらった。ビジュアルに使ったモチーフが在日の子と日本の子とが肩を組んで、いたずらっぽくポーズしている写真だった。今も彼ら彼女らの笑顔を覚えている。

あれから６年、私は仕事と障害者解放運動と「松葉杖で歩いてきたオッチャンの話」を子どもたちに語りかける学校巡りに明け暮れ、生野センターとは関わりを持たずに過ごしてきた。この間、当センターは生野の地を拠点に、一人一人を大切にし、それぞれの違いを尊重しつつ共生して暮らす地域のあり方を地道に模索されてきたようだ。そして嬉しいことに、センターが地域への感謝とその役割をより多くの人に知ってもらうための５周年記念イベント企画に参加させてもらうことになった。

当センター主事の呉光現さんが大ファンという、芸人マルセ太郎さんの一人芝居が実現することになった。私も数年前に、スクリーンのない映画館「泥の河」を見て魅了され、映画「泥の河」を見たくなり映画館に出向いたことがあった。

初演「泥の河」の観客の一人に永六輔さんがいた、という。10年ほど前のこと。永さんは「映画批評をエンターテイメントにした」と激賞。それ以後、いろんな映画を素材に独自の境地を展開されているマルセ太郎さんだが、今回はその「泥の河」に、ジャズ奏者の金成亀（キム・ソング）さんが共演してくださるというから、どんな雰囲気が醸し出されるだろう。今からわくわくしている呉さんと私だ。

実は、今回の５周年記念イベントに永六輔さんも来てくださることになった。夢のようなホントの話。永さんはいま、私が事務局長を務める阪神・淡路大震災における被災障害者支援【ゆめ・風・10億円基金】の呼びかけ人代表として全国を旅しつつ、あちこちでこの基金運動を広げてくださっている（この基金運動の詳しい趣旨は当日のリーフレットをお読みください。マルセ太郎さんも呼びかけ人のお一人）。人間の深い哀感をていねいに、そして人と人との間に何があるかを見続けてこられたお二人のトークは、私たちに何を語りかけてくるだろうか。

こうしたマルセさん、金さん、永さん、そして司会役を快く引き受けてくれたロックシンガーの趙博さん（彼は河合塾の英語教師でもあり、河合出版から私の本を出してくれた人）の熱い思いになんとしても応えたい。その意味からも５周年イベントは、日頃の地域への感謝を込めてチャリティー性を打ち出し、その収益は、生野センターが働きの一つとして支援している、精神障害者たちが地域社会で気持ちよく暮らしていくための環境づくりをめざす作業所「トータス・ハウス」と被災障害者支援「ゆめ・風・10億円基金」にて活用されることになった。こんなにありがたく、うれしいことはない。

（まきぐち・いちじ　聖公会生野センター開設５周年記念行事実行委員、大阪聖ヨハネ教会信徒、被災障害者ゆめ・風・10億円基金事務局長）

### ちょっとひと息①

**「바닷가 개는 호랑이 무서운 줄 모른다」**
**「海辺の犬は虎が恐ろしいという事を知らない」**

海辺に住む犬は虎を知らないので、恐ろしいということを知らないことでありどれほど恐ろしくてもそれを知らない人には恐ろしいことはないと言う意味

# 在日韓国人の一人として

咸　仁公

自分が教会につながったのは一体何故であったのか。自分にとって福音とは何なのか。

このように自問したとき、今回予定されている宣教協議会に対する自分勝手なイメージが浮んでくる。そのイメージは決してそう穏やかなものではない。日本最大の在日居住者地域生野を教区内に含む大阪教区にとって、在日の問題にどう取り組んできて、どう取り組んでいこうとするのか、は避けて通れない課題である。それはまた、社会と共にある教会であろうとするのか、なんらかの限界性を自ら求めて一部の社会だけと共にある教会であろうとするのか、ということと同義であると思う。

戦後50数年を経て経済大国となった日本であるが、私には現在の日本が病み疲れた姿にみえる。21世紀を目前にして、多岐にわたる分野でその構造変革の必要性が説かれながらも、変革後の明日の姿を明確にできないまま無為に時間を浪費しているようにみえるのである。尊敬を受けていたはずの各界のトップ達の不正摘発が民間・公共を問わずあいつぐ現象も、明日への展望に裏打ちされた倫理観を持てない社会が内に向かって腐敗していく始まりなのかもしれない。こうしたことは、戦後処理をする間もなく、つまり自らの努力でたち直る間もないまま、朝鮮動乱やベトナム動乱などを頂点とした、東西冷戦構造の激化という外的要因の中で、経済成長の恩恵にあずかりひた走ってきたため、自省の時を持たなかったことにその原因をもとめてもよいのかもしれない。教会もこうした社会の動きと無縁ではおれない。急激な経済成長イコール急激な欧米化の波の圧倒的なエネルギーのなかで何かを置き忘れたとしても不思議ではない。

戦後処理でいうと、日帝による植民地統治のもと、土地調査事業による土地の収奪や、創氏改名・日本語の強要などの諸政策により日本に渡ってこざるを得なかったり、強制連行によって日本に連れてこられた一世達を戦後どのように処遇したのだろうか。

その後、在日に対して祖国からは棄民、日本では同化の政策がとられた結果、民族教育が奪われ日本名を使い母国語を話せない二世・三世が大部分を占める現状へとつながってきたのであり、私もそのなかの一人である。時には日本名（通名）を使い日本人のように振る舞い、時には本名で韓国人である。このような二重生活を続けていると、その使い分けをコントロールすることに疲れ果て、自分は一体何者なのかわけがわからなくなってしまう。通名を武器に日本人のごとく生きていけそうなものだが、その時は韓国人であることを隠しているという意識が負い目となり装わない人間関係がつくれず苦しい。単純に本名で生きようとすれば、日本社会や在日の通名社会から煙たがられる。この苦しみからの解放への期待が、私が教会につながった動機である。その意味で、日本社会が、というよりまず教会が在日に魂の解放をもたらすものであってほしいのである。差別という言葉があまり使われなくなってきているが、かといって、在日を生み出した側がその側同志で、お手盛りで在日の問題はもう終わったとする傾向には警鐘を鳴らしたい。同時に、私も含めた在日の側も日本社会の非を責めるばかりでなく、在日独自の民族性の創造という点で新たな将来への展望をつくりだしていかねばならない。

以上の脈絡から、今回の宣教協議会が、克服すべき課題の総花的な列挙に終わることのないことを願っている。在日を生み出す結果をもたらした近現代史の過ちに結果として連なってしまった教会の姿をまず見つめ、個々人の内にこもってしまう教会の姿が結局は社会の流れに翻弄されてしまうことを認めることがすべての第一歩だと思う。それができれば、個々人のそれぞれの関わりの中で、気付かないできた弱くされてきたものとの応答がはじまってくるのではないか。そして、そうした応答こそが神のみ業に連なるということなのではないか。宣教協議会でこの観点からの話し合いがあればと望んでいる。

最後に、もちろんわたしにとっての福音は、在日として本名での生活を求める祈りを神がききとどけてくれることであり、教会が与えてくれる励ましであることはいうまでもない。

（はむ・いんごん　聖ガブリエル教会信徒　大阪教区在日韓国・朝鮮人宣教協働委員会副委員長）





# おびえる日本人……の私から

久保　麗子

タマゴッチは新製品のベビーカステラか？といったら知り合いに笑われた。じゃあ玉子型の時計かァ？と聞いたら、あんたはほんまに知らんのか、と又笑われた。

その後タマゴッチとは何であるかを１時間もかけてある子が教えてくれた。

それで私はタマゴッチが嫌いになった。でも私はその子が好き。

ある子に私が「仕事で新聞をを作っている」というと、翌週その子が手作りの新聞を作って持ってきた。

目をキラキラさせながら。私がその新聞を読んでると、横でじっと見てる。熱い視線がビンビン。「いいねえっ！」っていうと、さっきより一層、目がキラキラした。

なんだかウキウキした。「又、作ったら見せてネ」というと「気が向いたら書くねん」といった。

山をよく知っている人に「良い山はどんな山ですか？」と聞くと「いろんな木が一緒に育っている山です。」と言った。

96年の12月に精神障害者の生活の場づくりを進める会（準）主催の『当事者は今 Part II』というテーマのシンポジウムがあった。友達がパネラーとして皆の前で自分のことを話した。私もパネラーになりその友達の隣に坐り、話しをした。

彼女はしんどい話をしっかりと話した。ステキに見えた。

地域にはいろんな人が居るといいと思う。ここに欠けているもので大切なものがあるとしたら。女性、老人、在日韓国・朝鮮人、在日外国人、部落の人、アイヌの人、沖縄の人、身体障害を持つ人、精神障害を持つ人、それらを知らない人。

みんな居ないとさびしい地域になるだろう。私は色んな人の事を知らない人が一番大切。きっとおびえているだろうから。

こう思えるようになったのは、タマゴッチを知らなくて笑った大人、タマゴッチの説明を１時間もかけて教えてくれた小学生、手作りの新聞をくれた中学生。良い山を教えてくれたおじさん、パネルディスカッションで話した友達…等々々。その人たちとの出会いだったと思う。

それまでは何も知らない、知らされていない、知って知らぬふりの日本人だった私だったから。おびえる日本人がわかる。

まだまだ、そこかしこに落とし穴はあるだろうけれど。でも出会わなければ。私から、あなたから、どちらでも。

地域には色んな人が居るといいなぁと思う。闘わなくてもいい、競わなくてもいい、訴えなくてもいい地域。

今回のパネルディスカッションで語った人たちのパワーを借りて、できることから始めようっと！

（くぼ・れいこ　コリアボランティア協会）

## ちょっとひと息②

**たまごっちブーム**

**母「めぐみ、あんた何してんの」**

**子「たまごっちしてんの」**

**母「へー、一生懸命やなぁ」**

**子「うん、まめに世話せんと死んだりグレたりするねん」**

**母「あっそ、そらそうともう10時やけど学校は」**

**子「今日はもう休むわ」**

**母「それやったら、あんたがグレてるやんか」**

**子「けど、お母さん朝起こしてくれへんかったやろ」**

**母「そんなん言うたかて、お母さんも、たまごっちしてたんだも〜ん」**

（笑福亭仁嬌）

## 笑福亭仁嬌（しょうふくてい にきょう）さん　プロフィール

**本名**　岡塚　明　1958年生まれ　血液型　O型
**出身**　京都市　所属　吉本興業株式会社
**趣味**　プロレス観戦　草野球　ゴルフ

1977年　4月　笑福亭仁鶴に入門
1978年　11月　しんめい寄席で初舞台

こみち寄席（聖公会生野センター主催）、仁鶴一門会等の地域寄席や落語会に出演

披露宴やカラオケ大会の司会のほか、大道芸では南京玉すだれやバナナのたたき売りも演じる。

# 大阪考

高二三

## 『在日コリアン関西パワー　ホルモン文化７』

（1997年新幹社刊）
1545円【本体1500円＋税】

潜在的に儒教意識の強く残っている私には、自分が作った本をほめることは出来ない。出来の悪い子ではあっても、身をちぎって産み落とした子はいとおしく、ついついひいきにしてしまいがちではあるが、それが儒教的倫理観では最も恥ずかしいことなのだ。それで最初は聖公会生野センターからのこの企画をお断りしたのだが、出版ウラ話の様なことを書いて、形になった本をさらに立体的に受け止めていただけるとしたならば、それはそれでよろしいのではないか。と思い直し、ペンを取った次第である。今回が第１回目なのであまり自信はない。

同世代の在日韓国人をみていると、どうも大阪で生まれ育った人たちがまぶしく見える。話している朝鮮語も上手に聞こえるし、歌もうまく、踊りも上手に見える。あげくは、ものを食っている姿までたくましく見えるから不思議である。なぜだろうか。その秘密を解き明かしたいと思って特集されたのが本書である。

私は大阪に行くと必ず生野区中川にあるＰホテルに泊まる。そして必ず歩いて（朝鮮マーケットを通って）鶴橋駅まで出る。30分ぐらいかけてゆっくり。何度も迷子になりかけたが、今は通る道も決まり、なじみの肉屋も乾物屋も出来た。時間の無駄遣いのように思えるのだが、もうそれが楽しみになっている。すれ違う自転車の人々、店先にいる人々、動く絵の中を歩いている私がいる。そして、知り合いともよく出会う。関西在住の友人たちは私のそんな行動が不可解なようだ。「猪飼野」を見物するだけならもう済んだと言えるくらいの回数は歩いた。だが私の目的が見物でありながら見物ではなく、その風景の中に私がいることで、大阪に来たという事を満喫するのだから、これからも駅まで毎回歩き続けることになるだろう。

今回、本書を出してみて思ったことがある。それは、活字にしてみると思っていたほど大阪の男はおもしろくないという事実だ。酒席で話したり、踊ったり歌ったりしていると、あんなにも面白い関西の男たちが、原稿を頼んでみるとたいして面白くないのである。大阪の男と活字は相性が悪いのかもしれない。いやいや私の友人たち（つまり書き手たち）はまだまだ若く、活字で表現することに慣れていないだけなのだ。出版社のオヤジとしては活字の相性の良い大阪の男を必ずや掘り出そうと思う。さて、なぜ大阪の男、と限定したのだろうと気がつかれたと思う。金蒼生(キム・チャンセン)氏「猪飼野発同胞歌留多」この一つの文章のためにそのような表現になった。大阪は本国の済州島同様、男は口ほどにもなく、いざというと時には女でもっていると言ったら怒り出す男が出てくるだろうか。個人的な感想からすれば本書で最初に推薦したい文書がこの金蒼生さんの文章。編集長の朴一(パク・イル)氏は、社長の好き嫌いで文章の掲載順が決まると、ぼやいている。

先日、18年ぶりに金蒼生氏と「邂逅」と呼ぶにふさわしい再会を果たした。そして気がついた。私が「猪飼野」の迷路のような街を懐かしいと思ったものが、実は母なるもの、大阪の女たちに憧れを抱いていたからなのだ、ということに。原点へ、原点へと、子宮の中をさまよい、そして大阪の街に抱かれにいくんだ、と。

関西人には迷惑この上ない事かもしれないが、関西以外の地域に住む朝鮮人の中には権威や秩序に縛られないで、地域で、生活の中で生み出される大衆文化に憧れ、期待している。そんな思いを託した本として、本書が広く読まれることを願っている。

（こ・いさむ　新幹社代表）

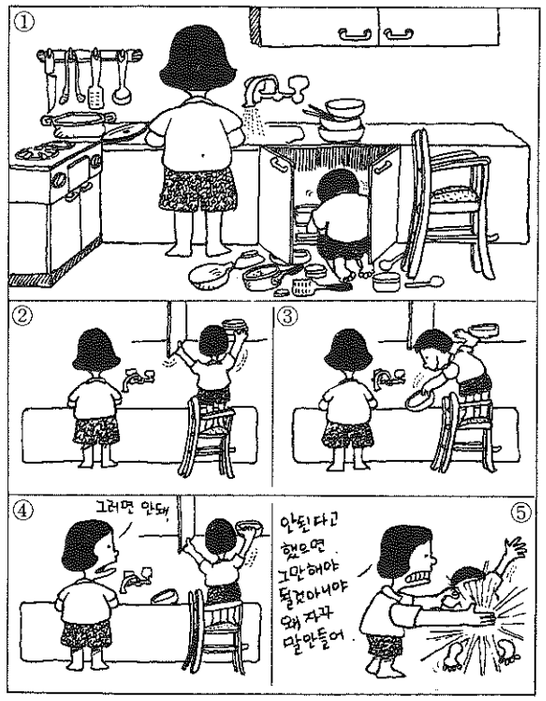
『在日コリアン関西パワー　ホルモン文化７』は
聖公会生野センターでも取り扱っています





連載マンガ③

## 청개구리（あまがえる）※




⑧「台所のドアーをしめてやれよというのにそうせずに、こどもに大声で怒鳴って、自分が間違ったのも考えもせずに」
⑨「こんなに暑い日に台所のドアーを閉めて働く人がどこにいるの。」
⑩「ちがう方法があるのに自分が楽になろうと叩くのだろう」
⑪「よしよし泣くな。アッパ（おとうちゃん）と遊ぼう」
⑫しばらく後…「ひえ〜。叩くこともできないし…」

作者：崔正鉉（ちぇ・じょんひょん）
パンチョギ（もう一方）の愛称で親しまれる。1960年韓国大邱生まれ。娘の誕生以降子育てをマンガで表現。そのユニークな描写と男性優位の韓国社会で家事分担が評価。1995年第１回平等夫婦賞受賞。

※あまがえるは韓国語で「あまのじゃく」という意味を持ちます。

④「そんなんしたらだめ！」
⑤「だめだといったら、やめなさい。なぜいうことをきかないの」
⑥「こどもをなぜ叩くの」
⑦「危ないのに高いところに上がって食器を投げるからよ」

**新幹社**　東京都千代田区飯田橋2-13-9 TEL(03)3221-9947

在日二世の高二三氏がはじめた。在日・韓国・人権・アジア・第三世界と、日本で生きる私たちが知り、感じ、考えなければならない「人を大切にする」「少数者として立つ」ことを出版の基本にしている。今後とも、新幹社の本を多く紹介していきたい（編集部）

# Lost Names

Richard E. Kim

*This story is based on the history of Korea and Japan. The author remembers one winter day when he was a boy in Korea.*

1

When I arrive at the school, our teacher is already in our classroom. He is a young Japanese, a recent graduate of a college in Tokyo. He is twenty-four years old, soft-spoken, and rather gentle with the children. He is so lean that we give him a nickname: Chopstick. Always palefaced and unhealthy looking, he likes to read Japanese poetry in class, though we hardly understand it.

The teacher stands up, looking at a piece of paper in his thin hand. He keeps silent for a long time, looking out the windows. Outside, the wind is roaring, the snow whipping down. The snow is so heavy and thick that I can hardly make out the other buildings across the frozen pond.

"Well" he says.

And I bid the children rise from their chairs, and, when they do, I command them to bow to our teacher. We all bow our heads to him; then we sit down.

"Today." he says, without looking at us, holding up the piece of paper in front of him, "I must have your new names. I have the new names of most of you in this class, but the principal tells me that some of you have not yet registered your names. I shall call your old names, and those who are called will be excused from the class immediately. They can go home and return with their new names registered with the proper authorities in town. Do you understand what I am saying?"

Without waiting for our reaction, and still without looking at us, he calls out several names. My name is called.

"You may be excused," he says, crushing the piece of paper into a ball. "Report back as soon as you can."

He gets down from the platform and says,"The rest of you will remain quiet and go over your homework." With that, he turns away from us and walks out of the room.

I put my shoes on outside the classroom and start running away from the school as fast as I can in the blinding snow. My new name my old name, my true name, my not-true name? I am pushing through the snow, thinking, "I am going to lose my name; I am going to lose my name; we are all going to lose our

# 名前までも

リチャード・E・キム

この物語は韓・日の歴史に基づいている。作者は少年の頃の、韓国での冬のある日一日のことを思い出しているのである。

1

学校に着くと先生はすでに教室におられた。若い日本人の先生で、東京の大学を卒業されたばかりの方であった。年は24才、穏やかな語り口、生徒に優しい方。あまりにもほっそりしていたので「お箸」とあだ名を付けていた。いつも青白い顔をしていて病弱そうに見えた。日本語の詩をよく読み聞かせてくださった。難しくてなかなかわからないものであったが。

先生はその日、立ち上がり、か細い手に一枚の紙を持ちそれを見ておられた。長らくじっと黙ったまま窓の外に向かってであった。窓の外には風が吹きすさび雪が叩きつけていた。降りしきる雪の激しさと言えば、凍てついた池を挟んで向こう側にある建物群がぼやっとしか見えない程であった。

先生は「さあ」と口を開かれた。私はみんなに椅子から立ち上がるように号令した。みんなが立ち上がったところで先生に礼をするように合図をするのであった。生徒はみんな頭を下げ、そうして座るのであった。

「きょうは」と先生は口を開いたきり、私たちの方には視線を向けることをせず、目の前に紙を持ったままであった。そうして言われた、「皆さんの新しい名前を戴かなければならないのです。この学級ではほとんどの生徒については新しい名前を聞いています。けれども、校長先生のおっしゃるにはまだ幾人かは新しい名前を登録していないということです。今からみなさんの元の名前を呼びます。呼ばれた生徒はすぐに教室から出てください。家に帰って役所で登録した新しい名前を付けた上でなければ学校には戻って来れません。どういうことか分かりましたか？」

先生は、私たちの反応を待つこともなく、しかも依然として私たちの方に目を移さないまま幾人かの名前を呼ばれた。私の名前も呼ばれた。

「出て行ってください。」と先生はおっしゃり、持っていたその紙を手の中でぐしゃっと丸められた。「出来るだけ早くして戻って来なさい。」と続けられた。そうして、教壇から降り「残りの者は静かにして宿題をもう一度見直していなさい。」とだけおっしゃって背を向けそのまま教室から出て行かれた。

私は教室を出、靴を履き学校から走り出した。目前を遮る吹雪の中を猛烈な速さで走った。新しい名前、古い名前、本当の名前、本当でない名前？　顔面を打ちつける雪の中を駆け抜けながら「自分の名前を失う。名前を失う。みんな、みんな名前を失くしてしまう。……」と心の中で繰り返し言っていた。





names"....

2

My grandmother says, "Leave the boy home; He will catch cold."

My father says, "No, Mother. I want him to come with me. I want him to see it and remember it."

My father is wearing a Korean man's clothes; white trousers with the bottoms tied, a white jacket, and a gray coat. My father is seldom seen in our native clothes except when he has to attend a wedding or a funeral. He is wearing a black band on the left sleeve of his gray coat. He is not wearing a hat.

"Come on," says my father to me.

At the police station, a man sits at one of the tables facing the Japanese policeman. He cannot speak Japanese and has to have the words interpreted. The man is old; he helps out in the open-air market place on market days, doing odd jobs.

The Japanese policeman, dipping a pen in an inkbottle, does not lift his face from a large notebook on the table. He says to the Korean detective by his side, "Tell the old man we will pick out a name for him if he can't make up his mind."

The Korean detective picks up a sheet of paper and shows it to the old man, translating the policeman's words.

The old man shakes his head, looking at the paper, which contains a long list of names. "Anything," he says in a low voice, "It doesn't matter."

The Korean detective does not translate those words. Instead, he puts his finger on one of the names and says, "How about this one, old man?"

The old man says, "It doesn't matter which. No one's going to call me by that name anyway - or by any other name."

"Then , this will be recorded as your new name." The Korean detective tells the policeman the old man's "new" name, a Japanese name.

When our turn comes, my father takes a piece of paper from his pocket. He hands it to the Officer. "I assume," he says, "This is what you want. I hope you will be pleased."

The Officer looks at the paper. "Yes, yes," he says. "Ah, it is a very fine name, sir. I will have it registered."

"Come," my father says to me.

We step out into the cold. The snow is turning into blizzard. The long line of people is still standing outside, bent over, rubbing their ears and faces, stamping their feet in the snow. My father pauses for moment on the steps, one arm around my shoulders, and says:

2

祖母が「子どもを家の中に入れてやりなさい。風邪を引くよ。」と言った。父は「いいえ、お母さん。いっしょに来させます。その場を見てしっかり憶えさせるんです。」と答えた。その日、父は男物の韓服を着ていた。裾を絞めて結んである白いズボンに白い上服、そしてグレーのコートをまとっていた。父が韓服を着ているのを見たことは滅多になかった。結婚式か葬式に出る時ぐらいにしか見なかった。グレーのコートには黒色の腕章を巻いていた。帽子はかぶっていなかった。「来なさい。」と父は言った。

警察署では机ががずらっと並んでおり、机の向こう側に日本人署員がこちらを向いて座っている。その一つの机の前にひとりの男性が座っていた。男性は日本語ができず通訳を要した。男性は年を取っており、青空市の立つ日に雑多な仕事を手伝う定職を持たない人であった。

日本人署員はインクビンにペン先を浸している。その間も机の上の大きな帳簿から目を放さない。署員は傍らに居る韓国人刑事に「もし、決心がつかないようならこっちで決めてやるとじいさんに言ってやれ。」と指示した。韓国人刑事は一枚の紙を持ち上げて年配のその男性に見せ、日本人署員の言葉を通訳した。男性は紙を見ながら首を振った。その紙にはいろいろの名前がずらずら書かれていた。男性は「どうでもいい。関係ない。」と低い声で吐いた。韓国人刑事はそんな言葉は訳さないで名前の一つに指を置き「じいさん、この名前はどうかね？」と聞いた。年寄りの男性は「どんな名前でも同じことだ。だれもその名前で呼ぶわけでもないし、かといって別の名前で呼ぶわけでもなし。」と。「それではこれがお前の新しい名前だ。」と言いつつ韓国人刑事は年を取ったその人の新しい名前、日本名を日本人署員に告げるのであった。

私たちの番になったとき、父は一片の紙切れをポケットから取り出し、それを係官に渡した。父は紙切れを渡しざま、「多分これをお求めでしょう。ご満足でございましょう。」と言った。係官は紙切れを見て「はいはい、たいへん立派なお名前で。登録しますよ。」と受け合った。

「来い！」と父は私に言った。父と私は塞空に足を踏み出した。雪は今や猛吹雪となっていた。外にはなおも多くの人たちが長蛇の列をつくっていた。からだを丸め、耳と頬をこすりながら雪の中で足踏みをしていた。

父は少し歩いて一瞬立ち止まった。片手を私の肩に回して言った。

「見るんだ。」

私は一瞬恐くなった。どうしていいか分からなかった。冷たかった。父の顔を覗くと目に涙が潤んでいた。「この場面をじいっと見ておくんだ。しっかり憶えておくんだ。きょうのこの日を忘れるでないぞ。」 押し殺すような低い声であった。

"Look."
Afraid, confused, and cold, I look up at his face and see tears in his eyes.
"Take a good look at all of this," he whispers. "Remember it. Don't ever forget this day."

3

I return to the school to report my new name to the teacher. After school, the teacher walks home with me. We meet my father in front of my house.
"I hope you don't mind my bringing him home," says my teacher to my father, casting a quick glance at me.
"Not at all."
A moment of silence follows, all of us standing there in the blowing snow by the gate. I am wondering if my father will invite the teacher in, but he is quiet and shows no hint of asking the young Japanese in.
Then, the teacher gestures suddenly, as if to touch my face, "I am sorry," he says.
My father gives him a slight bow of his head.
"Even the British wouldn't have thought of doing this sort of primitive thing in India," says the Japanese.
I am at a loss, trying to understand what he says and means.
". . . forcing on you this humiliation . . . ." he is saying, ". . . unthinkable for one Asian People to do this to another Asian people, especially we Asians who should have a greater respect for our ancestors. . . ."
"The whole world is going mad, sir," says may father quietly. "It is going back into another dark age. Japan is no exception."
My teacher nods. "As one Asian to another sir, I am deeply ashamed."
"I am ashamed, too, sir," says my father, "perhaps for a reason different from yours."
My teacher , without a word, bows to my father, turns round, and disappears into the blinding snow.
"It is a small beginning," says may father. He hugs me. "I am ashamed to look in your eyes," he says. "Someday, your generation will have to forgive us." I don't know what he is talking about. but the scene and the atmosphere of the moment, in the roaring wind and with the snow gone crazy, make me feel dramatic.
"We will forgive you, Father," I say generously.
His arm tightens around my shoulders. "Come on," he says, leading me into the house. "We have one more place to go to. Your grandfather and I are going out to the cemetery. Would you like to come?"
I nod. I am, suddenly, too awed by mysteries beyond my child's understanding to speak.
"I hope our ancestors will be as forgiving as you are," he says. "It is a time of mourning."
And, only then do I understand the meaning of the black band on his sleeve.

3

私は先生に新しい名前を告げるべく学校に戻った。放課後、先生は私に伴って家までの道のりを一緒に歩かれた。家の前には父が立っていた。「お子さんとお家までいっしょに来てしまったのですが……。」、と先生は一瞬私に一瞥を送りざまそう言われるのであった。

「いいですよ。」と、父。

しばしの沈黙が続いた。三人とも吹きすさぶ雪の中、門前に立ち尽くした。私には父が先生を家の中に招き入れるかどうか分からなかった。しかし、父はじっと沈み込んだままだった。その若い日本人を家の中に招き入れる素振りは全然示さなかった。そのとき突然、先生はからだを少し動かされた。私の頬に触れるかのように。そうして「すみません。」と仰った。父は黙ったまま、ただ、軽くその人に会釈を返した。この日本の人はこう続けた。「英国でさえインドでこんな野蛮なことはしなかった。」 私は面食らった。この人は何を言ったのか、言った言葉はどういう意味かと考えながら。さらにこの人は、「……あなたがたにこんな侮辱まで……。考えられません。同じアジアの人間が同じアジアの人たちに、こともあろうに自分たちの先祖と仰ぐべき方たちに……」と言うのであった。「世界全体がおかしくなっているんですよ、先生。」と父は静かに口を開いた。そうして、「また、暗黒時代が来たのです。日本も例外ではありません。」と応じるのであった。先生はうなずかれ、「ひとりのアジアの人間として私は恥ずかしくてなりません。」とおっしゃった。

「私も恥ずかしいのです、先生。日本の方たちとは違った意味だと思いますが。」と、父。

先生は一言も発せず父にお辞儀をされた。そうして、踵を返し真っ黒い雪の中に消えて行かれた。

「まだ始まったに過ぎない。」と言って父は私を抱きしめた。「お父さんは恥ずかしくてお前の目を見ることができないのだ。」父の語る言葉には不思議で分からないことが時々あったが、まさにそのような言葉であった。父は続けて「いつか、お前が大人になった時代にはお父さんたちを赦してくれるだろう。」と言う。父が何を語っているのか分からなかった。けれども、その場、その雰囲気、その瞬間、風が吹き荒れ、狂ったように雪が舞っていた。私の胸は高鳴った。「お父さん、勿論ゆるします。」と私はおおらかに答えた。その刹那、私にまわされていた父の腕にぎゅっと力がこもるのを感じた。「さあ行こう。」と言いながら父は私を家の中に入れた。そうして、「もう一個所行かなければならないところがある。おじいさんとお父さんはお墓に行かなきゃならんのだ。いっしょに来てくれるか？」と言うのであった。
私はうなずいた。その瞬間、物の気がついたようなりつ然としたものに触れ、子どもの私には解せない、言葉に現せない何物かに包まれた。
父は、「ご先祖さまも、お前と同じようにおおらかであればな。今は悲しみの時なんだ。」と言うのであった。そのとき、その一瞬になって父の腕に巻いてあった黒いものの意味が分かった。





Today, I lost my name. Today, we all lost our name.
February 11, 1940.

きょう、私は名前を亡くした。みんな名前を亡くした。
きょう、1940年２月11日に。

日本語試訳　金山昌照司祭
（かなやま・まさてる　プール学院大学チャプレン）

Richard. E. Kim (1932- )
ハムフン（咸興、現在、朝鮮民主主義人民共和国の都市）に生まれ、のち大韓民国国立ソウル大学を経て、1954年アメリカに渡った。アイオワ州立大学、ハーバード大学などで英語と創作文学を学び、1964年アメリカ合衆国の市民権を得た。この作品は Lost Name (1970)（『名を喪って』）から抜粋したものである。Lost Name は "Scencs from Korean Boyhood" という副題がつけられた自伝的作品で、著者が幼児の時から1945年の解放までの日本統治下の受難と苦悩を、語り手である少年の回想として描いている。

筑摩書房　高校３年生　英語教科書
RACCOON ADVANCED ENGLISH READINGS

昨年来の「歴史認識」をめぐる論争は中学教科書に載ることになった「従軍慰安婦」の記述に反対した、右からの動きが顕著である。今年、高校３年生の英語の教科書に「創氏改名」を学ぶテキストがあることを知った。現代の若者が今回掲載した内容を通して英語を学ぶのは大切なことと思う。私たちも、もう一度若者が学んでいる「英語を通して」学ぶのはいかがだろうか。（編集部）

## ちょっとひと息③

**「산골부자가 해변 개보다 못하다」**
**「山里の金持ちは海辺の犬より至らない」**

海辺には魚が豊富であり犬もいつも魚を食べられるが、山里では魚は貴重品であり金持ちでも魚を食べるのはたやすいことではないという意味

## 創氏改名について

中川　知美

誰しもが当然のように持っている姓。しかし、もしそれを失ってしまったらどうであろうか。1939年に交付され、1940年２月11日に実施させられた「創氏改名」は、大日本帝国が朝鮮に対してつきつけた姓の剝奪命令である。
その日、父親は白いパヂ・チョゴリをまとい、そでには黒い腕章、この腕章は強制への強い抗議を表していて、朝鮮人としての誇りを失うまいとしていた。日本人教師が父親に「この日のことをおなじアジア人としてとても恥ずかしい」と深々と言うと、「私も恥ずかしい。しかしあなたとは違う意味で。」と答えた。朝鮮では、姓は一族の誇りであり人間としての尊厳、命の次に大切なものである。それをいともたやすく奪われた彼ら彼女らの気持ちは、悔しさや怒り、やるせなさでいっぱいだったことだろう。父親のこの言葉だけに限らず,彼の一言一言は重々しく威厳のあるものばかりだった。子どもはどんな気持ちで父親と先生の会話を聞いていただろうか。今ははっきりと理解できなくとも、成長するにつれこの日のことを知ってき、どのように受け止めていくだろうか。
私は「創氏改名」の最終目的が、朝鮮人を兵隊にする、ということを別の本で知った。そのことを知って、私自身、彼ら彼女らに対して申し訳なく、日本人として人間として恥ずかしく思わずにはいられない。なぜ、ここまでして朝鮮人を使い、苦しい目に会わていくのか。日本人が朝鮮人にした数々の仕打ちについて知っていくことは、今後の自分の課題になっていくことだろう。
父親が白いパヂ・チョゴリを着たのには、もう一つ意味があったように思える。この国では、白のパヂ・チョゴリは葬式の時に着る。つまり姓を失ったと言うことで自分も失ったと言うことをかけていたのかもしれない、ということである。
（なかがわ・ともみ　プール学院大学学生）

## 聖公会生野センターへのご支援をお願いします

○後援会費
年額　1口　3,000円（個人）
　　1口　10,000円（団体）

・郵便振込
００９６０－０－１３３４２９
「聖公会生野センター後援会」

□自由献金もよろしくお願いします
・郵便振込
００９１０－１－３２１７８０
「聖公会生野センター」

・銀行振込
三和銀行　東大阪支店
普通預金　３７１１３１１
「聖公会生野センター」

### 余　韻

・最近ショックだったこと。10代の頃からの友人にあるものを購入してもらったので、友人の銀行口座に振り込みをすることになった。友人から指定された名義は日本の名前だった。10代の頃からその家族の本名しか知らなかった私は、あの家族が、日本名の通名を持っていることを知らなかった。お金を振り込みながら、全く別人に振り込むような気がした　（恵）

・柳美里（ゆう・みり）さんのサイン会妨害事件。ああ、またこんな事が起きたのかと、腹立たしい。というよりも、情けなーい気持ち。「差別」という三角形のヒレをピンと立てて、「無関心」という名の大海を、気ままに泳ぎ回る無頼で陰湿なサメども。そんな光景を連想した。　（大）

・昨年の夏に原稿を書いた「ホルモン文化７・在日コリアン関西パワー」が発行された。私にとっては初めての25枚の大作である。書き終わった後は「二度とこんな分量は書きたくない」というのが正直言ったところだったが、現実に活字になった私の文章を見ると「恥ずかしいやら、嬉しいやら」である。울림（ウルリム）も発行に際して色んな人に原稿を書いてもらっているが、書いて下さったみなさんはどんな感想かなあ、と知りたくなったりもする。ちなみに「ホルモン文化７・在日コリアン関西パワー」で書いた私の文章は『誰が集まってもええやないか』というタイトルで聖公会生野センターが始まってからの様々な人との出会いを描いたものである。是非ともこの機会に一読をしてもらったら嬉しいこの頃です。　（光）

・みなさんの励ましと、各方面に多大なご迷惑をかけてしまっている意識のおかげで、Drの言いつけどうりアルコールを３ヶ月遠ざけています。バレンタインでいただいたチョコも洋酒入りで指をくわえておあずけ。時間傷と自分を慰めて一人おちこんでいます。みなさんもうしばらく、私のいない静けさを満喫しておいてください。　（ハミー）

・春が一足飛びにやってきた。入学式の頃の桜のはずが、いつの間にか卒業式のころの桜にはやまった。温暖化のせいだと思っていたら、「いや、復活日に咲くのだ」という説が登場した。なるほど今年は早い。その前に、植松誠聖公会生野センター運営委員会前委員長の主教按手式。春は北から…。
（てもて）

・今回から編集に加わりました。どうぞよろしく。　（す）

### 前号の訂正

前号「時のしるし」右段下から12行目

……そして、そのレッテルが自分に好都合であれば、それだけの理由ですべて受け入れる。逆にそのレッテルが自分に不都合であれば、それだけでその全部を排除する。誰しも……

発行所：聖公会生野センター
〒544 大阪市生野区小路東１-17-28
TEL 06-754-4356／FAX 06-754-4357
e-mail cyj02040@niftyserve. or. jp
発行人：木　村　幸　夫
編集人：大　橋　　襄